

# 京都大学東南アジア研究所図書室

北村由美

## 特集／アジア地域関連コレクション—わが国主要図書館の所蔵資料から

『地域研究のあゆみ—東南アジア研究センター三五年史』によると、京都大学東南アジア研究センター図書室（現東南アジア研究所図書室）は一九六八年に正式に発足し、約二〇〇〇冊の蔵書で発足した。現在でも当室で使われている独自の分類方法はこの当時のスタッフが編み出したものようである。この独自分類に象徴されるように、当時の図書室は、研究所の構成員による構成員のための図書室であった。

四〇年たった現在、東南アジア研究所図書室の蔵書は二〇万冊を超え、東南アジア諸語資料のみでも約六万点におよぶ。その他に、地図資料約四万枚および人工衛星画像約三〇〇〇枚を所蔵している。文献資料に関してはOPAC、地図・衛星画像に関しては、ホームページで公開されているデータベースにて大部分の検索が可能である。図書資料のうち、全国的にも充実しているのが、タイ語資料（約二万三〇〇〇点）、インドネシア諸語資料（約二万点）、ベトナム語資料（約九〇〇〇点）である。特にタイ語資料とインドネシア諸語資料に関しては、一九八三年以降ジャカルタとバ

ンコクにある連絡事務所を拠点にし、その時々駐在員を中心に研究所メンバーが書店を駆け回るという方法で、継続的な購入が行われてきた。

また、特別コレクションとして、チャラット・コレクション（タイ史・政治関係。約九〇〇〇冊、うち四〇〇〇冊は葬式本）、フォロンダ・コレクション（フィリピン史関係。約七〇〇〇冊）、オカンボ・コレクション（フィリピン史関係。約一〇〇〇冊）を所蔵している。

この四〇年の間に、東南アジア諸国をめぐる状況は非常に目まぐるしく変化し、国内外における東南アジア研究も急速に深化した。同時に、ゆるやかにではあるが、当研究所図書室をめぐる状況および当図書室に対して求められる役割も変化してきたといえる。国内における東南アジア研究資料の一拠点としての役割はもとより、国内および東南アジア諸国内の図書館と連携して相互の特徴を活かした収集・保存・発信が必要になってきた。

その中で、ここ数年当図書室では次の三点を心がけてきた。①これまでに蓄積して

きた資料および東南アジア関係資料の所在情報の発信、②地域の現状を反映した「旬」の資料の収集、③研究の過程で蓄積される一次資料の保存・提供である。①に関しては、現地諸語資料のオンライン蔵書検索システムへの入力をはじめ、以下のような文献目録の出版・配布と電子図書館化を通して、徐々に情報の共有をはかりつつある。

Navarat Panayangam, *Articles of Thai Cremation Books in the Center for Southeast Asian Studies Library Kyoto University*, 2006.

Wynn Lei Lei Tan, *Selective Annotated Bibliography of Books and Other Research Materials on Myanmar Agriculture*, 2005.

Pornpimol Manochai, *isan Information in CSEAS Library*, Kyoto University, 2004.

東南アジア研究所図書室『京都大学東南アジア研究所図書室所蔵マイクログラフィ目録—逐次刊行物編』二〇〇六年。

『太平洋戦争期のタイ新聞コレクション』  
<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/b77/rnage/index.html>

表1 インドネシアにおける日刊紙タイトル数の推移

年	タイトル数
1997	81
1998	172
1999	(ex) 225
2000	(ex) 396

(出所) UNESCO Institute for Statistics ウェブサイト (<http://www.uis.unesco.org/>) "Press: Number of Titles and Circulation for Daily and Non-Daily Newspapers, 1997-2000 Institute for Statistical" より抜粋。(ex) は世界新聞協会 (World Association of Newspapers) 提供、とある。



京都大学東南アジア研究所図書室の外観



閲覧室で資料を閲覧する海外からの利用者

次に、②に関しては、二〇〇三〜〇四年度には、インドネシアで急速に増えつつあったインドネシア語によるイスラーム関係の資料を収集し、インドネシア・イスラーム・コレクション(約一〇〇〇冊)を別途新設した。また、二〇〇六年度には二〇〇二年五月に独立した東ティモール民主共和国において網羅的な収集を行った。文献資料以外には、二〇〇五年にタイのVCD約八〇〇タイトルの収集を行った。いずれの場合も、所内外の研究者の協力を得て実現した試みである。

最後に③に関しては、多少実験的な試みとして、二〇〇四年にインドネシアの選挙グッズの収集と展示を行った。その他に、大学院生を含めた研究者によって収集される一次資料の保存・提供という課題に現在取り組みつつある。

しかしながら、実際には、よりダイナミックに海外との連携と資料の収集・保存・発信を考え直す時期にきている。インドネシア関係の事例が多くて申し訳ないが、例えば、インドネシアでは、一九九八年のスハルト政権崩壊後、日刊紙のタイトル数が鰻登りに増えている(表1参照)。ところが、なんらかの形でアーカイブを行っている新聞社は非常に限られており、パソコンのハードディスクの容量を超えた時点で、過去の紙面情報も消されている場合がほとんどである。アメリカ議会図書館やインドネシア国立図書館が、地方紙を含めた新聞のマ

イクロ化と保存に尽力しており、日本でもアジア経済研究所図書館などが精力的に収集を行っているが、おのずと限界がある。このような現状を前に、国内外機関との連携・分担に積極的に取り組む必要がある。

インドネシアの新聞の例は、比較的緩やかな変化への対応だと考えられるが、一方で、二〇〇六年九月に起こったタイのクーデターのように、突然の出来事に対応する場合にも、機関間連携が不可欠であろう。具体的には、クーデターに関する批判的意見を含めたさまざまな言論活動の軌跡をタイ国外で蓄積し、将来的にはタイの研究者にも利用してもらええる環境を提供することなどが考えられる。

最後になるが、時代の変化の中で試行錯誤を繰り返しながら、当図書室の未来を展望する際、私たちは今一度基本的な質問を自らに投げかける必要を感じる。すなわち、「東南アジア地域研究資料」とは何なのか。どのように収集され、共有されていくべきなのか。国内外の地域研究者、アーキビスト、学芸員とともにこれらの質問を検討していくことから、今後の東南アジア研究所図書室のあり方が見えてくるのではないだろうか。

(きたむら ゆみ/京都大学東南アジア研究所図書室)

【付記】 京都大学東南アジア研究所のホームページアドレスは、<http://www.gseas.kyoto-u.ac.jp/>